

## 間一髪の半過去 (imparfait d'imminence contrecarrée) をめぐって

渡 邊 淳 也

### 1. はじめに<sup>1</sup>

本稿は、フランス語における動詞の直説法半過去 (imparfait de l'indicatif) の、「間一髪 (imminence contrecarrée)」<sup>2</sup> をあらわす用法を中心的な対象とする研究である。間一髪 of 半過去の用例としては、つぎのようなものがあげられる。なお、対照研究のための布石として、以下では例文に日本語訳をつけておくこととする。

- (1) Le taureau avait acculé Félicité contre une claire-voie ; sa bave lui rejaillissait à la figure, une seconde de plus il l'éventrait. Elle eut le temps de se couler entre deux barreaux, et la grosse bête, toute surprise, s'arrêta. (Flaubert, *Un coeur simple*, II)

雄牛はフェリシテを柵に追いつめていた。牛のよだれが彼女の顔にかかり、あと1秒で、牛は彼女を切りさくところだった。彼女は柵の2本の棧のあいだをすりぬけることができた。牛はおどろいて止まった。

- (2) Il entre dans l'église, n'a que le temps de refermer la porte sur lui ; et il tombe, évanoui de peur, sur les dalles! Une seconde de plus, il était pris et dévoré par les chiens... (Mirbeau, *Sébastien Roch*, I, III)

かれは教会にはいり、とびらを閉めるだけの時間しかなかった。恐怖に気をうしなつて、敷石のうえにたおれた。あと1秒で、犬につかまって食われるところだった。

- (3) Le mulet eut l'imprudence de me camper ses deux fers dans la poitrine. Il me renversa.

—Un peu plus, il était mort, disait mon grand-père.

(Stendhal, cité dans Wagner et Pinchon 1962, §. 444)<sup>3</sup>

雄ラバは不注意にも、両方の蹄鉄をわたしの胸にのせた。わたしはひっ

くりかえった。

—もう少して死んでいたぞ、と祖父が言っていた。

- (4) Une minute de plus, le train déraillait. (Riegel et alii 1994, p. 309)  
あと1分で、列車は脱線していた。

- (5) Heureusement que la cavalerie est arrivée. Une minute de plus, Lucky Luke était prisonnier des Indiens.

(Berthonneau et Kleiber 2003, p. 1)

さいわい騎馬隊がやってきた。あと1分で、ラッキー・リュークはインディアンの捕虜になっていたところだ。

- (6) Une minute plus tôt, tu la voyais. (idem)

あと1分早ければ、きみも彼女に会えていたのに。

- (7) —Je suis en retard.

—Oh non, tu arrives au bon moment. Un peu plus tôt, c'était pas prêt. (idem)

—遅れてしまったよ。

—いや、ちょうどいいときに来てくれたよ。もう少し早ければ、用意ができていなかったから。

- (8) [自転車で衝突を回避したとき] Un peu plus, je rentrais dans le pylône.  
(idem)

もう少しでわたしは車止めに突っこんでいたところだ。

- (9) Mais tu es fou de m'avoir bousculé ainsi! Un peu plus, je tombais.

(idem)

でもあんなに揺らすなんてどうかしてるよ。もうちょっとで転んでたよ。

- (10) Un mot de plus, il prenait une gifle. (idem)

もうひとこと言っていたら、かれは平手打ちをくらっていただろう。

- (11) Deux kilos de moins, je rentrais dans ma robe. (idem)

あと2キロやせていたら、ワンピースにからだははいつていたのに。

- (12) Un pas de plus, tout sautait. (idem)

あと一歩で、すべてがふっとんでいたところだ。

- (13) Elle a mis la main sur le loquet. Un pas de plus, elle était dans la rue.  
(Hugo, cité dans Berthonneau et Kleiber, ad loc.)

彼女はかんぬきに手をかけた。あと一歩で、彼女は通りに出ていた。

- (14) Encore un verre, il tombait raide. (Berthonneau et Kleiber, ad loc.)

あと一杯で彼は酔っていた。

- (15) [トラックの積載について] Une caisse de plus, on ne fermait pas la porte. (ibidem, p. 2)

あと一箱載せていたら、扉が閉まらないところだった。

- (16) [日曜大工用品店 Leroy Merlin の広告, 木製の柵に関して] Moins cher, c'était du fil de fer. (idem)

これより安いものといえば、針金くらいのものであったでしょう。

- (17) Sans vous, je m'ennuyais. (Le Goffic 1986, p. 64)

あなたがいなければ、わたしは退屈していたでしょう。

- (18) Sans la présence d'esprit du mécanicien, le train déraillait.

(Wilmet 1997, p. 390)

機関士の機転がなければ、列車は脱線していた。

## 2. 「間一髪の半過去」のおもな特徴

まず、「間一髪の半過去」の基本的な特徴を確認することからはじめよう。先行諸研究で意見の対立<sup>4</sup>がなく、また、とりあげる文例によって結果が相違することも無い、一致してみとめられる明白な特徴にかぎって示すとすると、つぎの4つをあげることが妥当であると思われる。

- (i) 文頭に、条件をあらわす副詞句が必要である<sup>5</sup>。副詞句をとりはらうと、「間一髪」の解釈は阻止され、事後的解釈となる。たとえば、つぎの例は、

- (19) Heureusement que la cavalerie est arrivée. Lucky Luke était prisonnier des Indiens.

さいわいにも騎馬隊がやってきた。ラッキー・リュークはインディアンの捕虜であった。

さきにみた(5)から副詞句 *une minute de plus* をとりのぞいたものであるが、このようにすると半過去から「間一髪」の解釈は消え、単に過去の状態をあらわすありふれた例になってしまう。

- (20) —Je suis en retard.  
 —Oh non, tu arrives au bon moment. #C'était pas prêt.  
 —遅れてしまったよ。  
 —いや、ちょうどいいときに来てくれたよ。#用意ができていなかったから。

(20)は、(7) から副詞句 *un peu plus tôt* をとりのぞいたものであるが、これも「間一髪の半過去」ではなくなり、状態をあらわす用法になる。そしてこの場合、「用意ができていなかった」にもかかわらず「ちょうどいいとき」であったとは通常は考えづらいことから、不自然なつながりになる。

(ii) 複合過去や単純過去は、この構文では(事实的解釈でも)用いられない。すなわち、つぎのような文は容認されない。

- (21) \**Une minute de plus, le train a déraillé / dérailla.*

(iii) 副詞句はかならず前置されていなければならない。副詞句を後置すると、「間一髪」の解釈は阻止され、事实的解釈となる。つぎの文は、事態としては完了的な過去を、説明的ないし描写的に(つまり、ある種の未完了相として)とらえなおした結果として半過去がもちいられていると解される。

- (22) *Le train déraillait une minute de plus.*  
 あと1分で、列車は脱線したのだった。

(iv) この用法の半過去を、条件法過去で言いかえることができる。(4)(5)(12)はそれぞれ、(23)(24)(25)のように言いかえることができる。ただし、後述のように「切迫」のニュアンスは薄れる。

- (23) *Une minute de plus, le train aurait déraillé.*  
 あと1分で、列車は脱線していただろう。  
 (24) *Une minute de plus, Lucky Luke aurait été prisonnier des Indiens.*  
 あと1分で、ラッキー・リュークはインディアンの捕虜になっていた  
らう。

- (25) Un pas de plus, tout aurait sauté.  
 あと一歩で、すべてがふっとんでいただろう。

一方, Le Bidois (1967, §. 1623) もいうように, 逆方向の言いかえはいつも可能なわけではない。

- (26) S'il avait fait beau, je serais sorti. (idem)  
 もし天気がよかったなら, わたしは外出していただしように。  
 (27) \*S'il avait fait beau, je sortais. (idem)

### 3. 問題点

本稿における考察で中心的な問題点としたいのは, 以下に枚挙する4つの点である。

第1に, この用法のなかで半過去が果たしている機能は, (未完了の) 過去を標示する時制的なものか, 非現実性を示す叙法的なものか, という問題がある。発話理論などのわく内で, 半過去の機能に関する操作的な説明が進んできた現在, もはや時制的か叙法的かという問題のたてかたはアナクロニズムではないかという反問が予想されるが, 実は「半過去はいたるところで斉一的な本質的機能を果たすのみであり, その2分法には意味がない」とこたえても, この問題は解消するわけではないと考えている。なぜなら, 「本質的機能」とみなされているものが, 超越的なよそおいにもかかわらず, 詮ずるところ時制的(過去の標示)であるか, 叙法的(心的空間の移動など)であるからである。時制的か, 叙法的かという区別は, 現在の諸理論にも, かたちをかえて生きているのである。

第2に, この用法の半過去が, 「反実的 (contrefactuel)」(Berthonneau et Kleiber 2003, 2006), 「非現実的 (irréel)」(Le Goffic 1995) な状況をあらわすとされることがある。たしかに, 純粹に言語外の事態にのみ注目するならば, 半過去であらわされる事態は, 実際にはおきなかったものであるといえるが, それなら (23)~(25) のような条件法過去との違いはないのか, という点を問わなければならない。

第3に, (28) にみるように「副詞句+半過去」という同様の形をとりながら, 間一髪の半過去とはちがって, 実現(完了)した事態を示す「断絶の半過

去 (imparfait de rupture)』<sup>6</sup>との差異化はいかになされるか、という問題がある。

(28) Comme elle avait été à l'Opéra, une nuit d'hiver, elle rentra toute frissonnante de froid. Le lendemain elle toussait. Huit jours plus tard elle mourait d'une fluxion de poitrine. (Maupassant, *Les bijoux*)

ある冬の夜、オペラに行っていたので、彼女は寒さですっかりこごえてかえってきた。翌日彼女は咳をしていた。8日後、彼女は肺炎で死ぬのであった。

第4に、副詞句の意味のタイプとして、(1)(2)(4)(5)のような「遅滞型」(時間的後続性をあらわす副詞句)のほか、(6)(7)のような「早期型」(時間的先立性をあらわす副詞句)、(8)~(18)のような「非時間型」(時間以外のなんらかの変異をあらわす副詞句)があり、文全体の意味をそれぞれにことなる態様で規定していると思われる。なぜそのように性質のことなる副詞句に対して、ひとしくこの用法の半過去をもちいることができるのであろうか。そしてそれらの類型のあいだの関係はどのようになっているか。一般的に、この用法における副詞句は、時間の経過を仮定することが主たる機能であるといえるか。

つぎの4節では第1、第2の問題を関連づけながら考察し、5節では第3の問題、そして6節では第4の問題を考えてゆくことにする。

#### 4. 「反実的」か、「現実的」な状況か

まず、(29)にみるように、間一髪半過去の条件法過去とひとしく「反実的」であるとする説がある。

(29) Semblables au conditionnel passé dans la même situation, ils [=imparfaits contrefactuels] signalent en réalité — d'où leur nom — que la situation n'a pas eu lieu ; le trains de *Une minute de plus, le train déraillait* [etc.] n'a pas plus déraillé que celui de *Une minute de plus, le train aurait déraillé.* [etc.] (Berthonneau et Kleiber 2003, p. 3)

しかし、実際には半過去のほうが条件法過去にくらべて「劇的な提示 (présentation dramatique)」(Wilmet 1997, p. 391) になるのであり、それらを同一視することには賛成できない。

一方、つぎの (30)~(33) のように、間一髪 of 半過去があらわすのはある意味で「現実的」な状況であるとする説もある。

(30) L'imparfait, comme le présent, exprime une chose possible, d'une éventualité immédiate, qu' on a actualisée par anticipation.

(Wagner et Pinchon 1962, §. 444)

(31) Cet *il était mort* [dans l'exemple *un peu plus, il était mort*] qui exprime dans le passé une possibilité imminente, répond exactement au présent dont on se sert dans une expression telle que : *N'avancez pas! un pas de plus et vous êtes mort!* où il anticipe l'avenir. (idem)

(32) A la différence du conditionnel, l'imparfait permet d'envisager fictivement le procès comme déjà en cours de développement, ce qui augmente la dramatisation du récit. (Riegel et alii 1994, p. 309)

(33) C'est même très vraisemblablement pour cette impression de vérité qu'on utilise l'imparfait (fictif), et non pas un conditionnel (*aurait déraillé*) qui dénote directement par lui-même la non-réalité du procès.

(Le Goffic 1995, p. 140)

これらの研究は、上でのべたようなニュアンスのちがいを説明しようという点で、基本的に賛同できるたちばである。ただし、(32) においては、なにをもって「仮構的に (fictivement)」といているのか、その意味あいによっては留保をつけたいところである。「仮構的」どころか、むしろ「半過去があらわす事行が成立しかかっていた」ことが、全き「現実」としてとらえられることこそが、「間一髪」の半過去たるゆえんではなからうか。

したがって、本稿では基本的に後者の立場にくみし、半過去が未完了アスペクトのもとでの現実の過去性をあらわしているとの考えからの説明をこころみる。

間一髪をあらわす用法ではないが、半過去にはつぎのような用法がある。

- (34) Elle mourait. Antoine aperçut, près des lèvres entrouvertes, deux petits cheveux enroulés, plus légers que des fils de la Vierge, et qui par intervalles, se soulevaient : elle respire toujours.

(Les Thibault, t. 1, p. 338)

彼女は死に瀕していた。アントワヌは、なかばひらかれたくちびるのそばに、蜘蛛の糸よりも軽い、ふた筋のほそい巻き毛があるのを見つけた。それが時をおいて高まっていた。まだ息をしている。

- (35) Je le trouvai chez lui : il sortait. (Martin 1971, p. 99)

わたしはかれの自宅でかれに会えた。かれは出かけようとしていた。

これらの例にみられるように、語彙的瞬間相の動詞に用いられたとき、半過去は単独でも（副詞句をとみなわなくても）事行の「未成立」をあらわすことができる<sup>7</sup>。そしてこの、「未成立」をあらわすという点は、間一髪半過去にも共通していると考えられる。すなわち、

- (36) Une minute de plus, le train déraillait.

あと1分で、列車は脱線していた。

- (37) Une minute de plus, le train aurait déraillé.

あと1分で、列車は脱線していただろう。

(36) の場合も、半過去の「未成立」をあらわすはたらきにより、「脱線しかけていた」、「脱線の過程を途中までは行っていた」ことが示されているのではなかろうか。そのように考えることによってこそ、間一髪半過去の例(36)が、条件法の例(37)にくらべて「劇的な提示」になることも説明できるのである。

## 5. 「断絶の半過去」との対比

つぎに、3節でたてた第3の問題、「間一髪半過去」と「断絶の半過去」との対比の問題について考えてみよう。この問題については、従来の研究では、つぎの(38)から(40)の引用にみるように、半過去があらわす事行が実現したのか、それとも実現しなかったのかは、原理的に曖昧であるとする説が圧倒的に多かった。



(38) Sans recours au contexte, la phrase (1) [= *Une minute de plus, le train déraillait*] reste ambiguë : elle peut aussi dénoter une action passée effective. (Riegel et alii 1994, p.310)

(39) Comme le montre l'ambiguïté de cet exemple [= *Une minute de plus, le train déraillait*], où l'IMP peut être compris comme «modal» (= *aurait déraillé*) ou stylistique (IMP narratif), l'IMP ne peut donner à lui seul aucune indication sur l'achèvement du procès.

(Confais 1990, p. 154)

(40) On retiendra que l'imparfait, pour ce qui lui concerne, affirme véridiquement dans ses lectures factuelle et contrefactuelle, et qu'il est par lui-même compatible avec un passé réalisé ou non-réalisé.

(Le Goffic 1995, p. 140)

この通説に反対して、Berthonneau et Kleiber (2003) は、副詞句の性質に応じて文の解釈は脱曖昧化するという説をとっている。以下、その所説をみておこう。彼らによると、...après 型 (*une seconde après, un instant après, une minute plus tard* など) の副詞句よりも、...de plus 型 (*Une minute de plus, un peu plus, encore un peu* など) の副詞句のほうが、間一髪解釈のすわりがよいという。たとえば、(41) は「間一髪」の解釈であるのに対して、(42) は両義的であるとする\*。

(41) On a eu une réponse. Un jour de plus, on écrivait au préfet.

(Berthonneau et Kleiber 2003, p. 7)

返事がきた。あと1日で、知事に手紙を書くところだった。

(42) On a eu une réponse. Un jour après /plus tard, on écrivait au préfet.

(idem)

返事がきた。その1日後、知事に手紙を書いたのだった。／もう1日遅ければ、知事に手紙を書くところだった。

断絶の半過去においては、半過去であらわされた事行は、副詞句によって、《t+1》(すなわち、所与の時点から一段後の時点) に位置づけられる。副詞句は物語のなかで時間の進行を一段飛躍 (un saut dans le temps) させる。それに対して、間一髪半過去においては、副詞句は所与の状況の長さに変更

= 修飾 (modification) をくわえるのみで、時間的定位の役割を直接には果たさない。その証拠に、持続を仮定する *si* 節で言いかえられる。

- (43) *Si la situation (le round / le combat) avait duré une seconde de plus, il aurait été K. O.* (ibidem, p. 10)

もしその状況が (そのラウンドが / たたかいが) あと 1 秒つづいていたなら、かれはノックアウトされていた。

- (44) *Si cela avait duré une seconde de plus, il aurait été K. O. (idem)*

もしそれがあと 1 秒つづいていたなら、かれはノックアウトされていた(だろう)。

持続というものは定義からして均質なものであり、くわえられる変更はもっぱら量的である。それに対して、断絶の半過去においては、副詞句が示す時間差のあいだに起きたあらゆる事実が暗黙にされており、質的変化が存在する。実際、つぎの (45) においては、

- (45) *Elle le vit, se montra, sourit. Le soir même, il était son amant.*

(Maupassant, *Le lit*)

彼女はかれを見た。姿を見せて、ほほえんだ。その夜、かれは彼女の愛人になるのであった。

「彼女」が「かれ」にほほえみかけてから、その夜、愛人になるまでのあいだには、いくつもの事実があったものと思われる。それに対して、間一髪 of 半過去をみちびく副詞句があらわす時間差には、文字どおり、「なにごともし起きていない」のである。

以上でみてきたような Berthonneau et Kleiber (2003) の説は、間一髪 of 半過去に適合する副詞句のタイプを峻別したという点で画期的であると考えられ、その峻別自体も妥当なものであると思われる。

しかしながら、副詞句ではなく半過去そのものに着目するなら、間一髪 of 半過去、断絶の半過去のどちらにもひとしく半過去をもちいることができるため、一定の共通の基盤を想定することも可能であると思われる。その共通の基盤とは、いずれの場合も、事態そのものが成立しようとなし成立であろうと、完了であろうと未完了であろうと、説明や描写のために未完了相の過去としてと

らえなおされている、という点である”。このようにいうと、間一髪の半過去と断絶の半過去とが「原理的に曖昧」であるとする Riegel et alii (1994) などの説にちかづいてゆくように見えるかもしれないが、実は半過去そのものの機能としては「曖昧」どころか、間一髪 of 半過去、断絶の半過去を通して「明確に一義的」なのである。半過去であらわされた事行が実際におきたかおきなかったかという、指示的・言語外的世界の「なまの現実」の問題を、意味の相違であるとして言語の問題へと直結する誤謬をただせば、このことは了解されるであろう。

## 6. 「遅滞型」、 「早期型」、 「非時間型」 の関係

「遅滞型」、 「早期型」、 「非時間型」 のあいだの関係について、 Berthonneau et Kleiber (2003) はつぎのような説をかかげている。いわく、「時間型」 (「遅滞型」、 「早期型」) の副詞句も、そもそも間一髪 of 用法においては時間的定位が本質なのではなく、持続の量的変更が本質であった。「非時間型」においては、変更される量が他のタイプにおきかわっているだけである (Berthonneau et Kleiber 2003, p. 16)。たとえば、つぎのようなタイプである。

- (46) 語数 : Un mot de plus もうひとこと言っていたら
- (47) 体重 : Deux kilos de moins あと 2 キロやせていたら
- (48) 歩数 : Un pas de plus あと一歩で
- (49) 積載量 : Une caisse de plus あと一箱載せていたら
- (50) 価格 : Moins cher これより安いものといえ
- (51) 空間的変異 : Un peu plus, je rentrais dans le pylône.  
もう少しでわたしは車止めに突っ込んでいたところだ。
- (52) 行為の強度 : Mais tu es fou de m'avoir bousculé ainsi! Un peu plus, je tombais.  
でもあんなに揺らすなんてどうかしてるよ。もうちょっとで転んでたよ。

このうち、(51) (52) の un peu plus は、なんの量であるかが意図的にぼかされており、量の変更というこの副詞句の本質のみをさししめず示唆的な例であるという。この説は、単なる量的変更に副詞句の本質をみることにより、さまざまなタイプの副詞句に均質の説明をあたえることができる利点があるよう

に思われる。

しかしながら、それによる説明が困難であると思われる事例も存在する。Berthonneau et Kleiber (2006) においては、Berthonneau et Kleiber (2003) の議論をさらに押しすすめて、sans...型の副詞句についても同様の説明が拡張できるとしている。その論拠のひとつとして、かれらはつぎのような事実をあげる。

- (53) Sans vous, je m'ennuyais. (Berthonneau et Kleiber 2006, p. 50)  
あなたがいなければ, わたしは退屈していたでしょう。
- (54) Avec vous, je m'ennuyais. (ibidem, p. 51)  
あなたがいたら, わたしは退屈していたでしょう。

(53) における sans...による「除去 (omission)」の条件は、(54) における avec...による「追加 (ajout)」の条件と正・負を反転させた関係にあり、それはちょうど、...de plus 型と...de moins 型における「増・減」の関係と平行的である。したがって、量の変更という副詞句の本質がこれらにも通底している、というのである。

しかし、sans...や avec...による仮定は、たんなる増減ではなく、有から無へ、あるいは無から有への変更なので、(46)～(52) のような意味での「量的変更」とは意味合いが違うように思われる。Berthonneau et Kleiber (2006) の説は、(53)(54) のような例を説明するには無理があるといわざるをえない。

一方、本稿でこころみているような、未完了アスペクトからの説明にとって、[「早期型」、[「非時間型」]の存在は、全般的に、すくなくとも一見したところでは、あつかうことがむずかしいように見えるかもしれない。未完了相による説明は、ある事態の未達成を半過去があらわしていると考えることから、副詞句でいうところの「遅滞型」のものにしか適用できないように見えるかもしれない。しかし、実は「早期型」、[「非時間型」]を、ほかならぬ「遅滞型」からの派生・拡張として説明することは十分に可能である。

「早期型」、[「非時間型」]の場合、未完了相は、半過去で示された結末に向かう過程が途中で絶たれたことを示していると考えられる。それは、半過去で示された事態の想定をうらぎるかたちでの未達成を意味していることから、「メタ未完了相 (méta-imperfectif)」とでもいべきものである。たとえば、

- (55) Une seconde de moins, il n'était pas K. O. (ibidem, p. 34)  
 あと1秒短かければ、かれはノックアウトされていなかった(だろう)。

においては、「ラウンドの終わりを告げるゴングに救われてノックアウトを免れる」ことにむかって進みつつあったシナリオが達成にいたらなかったことを未完了相の半過去が示している。

- (56) [= (15)] Une caisse de plus, on ne fermait pas la porte.  
 あと一箱載せていたら、扉が閉まらないところだった。

(56)では、「荷物が多すぎてとびらが閉められない」という結末に向かいつつあったシナリオが未完成におわったことを未完了相の半過去が示している<sup>10</sup>。

さらに、すでにみた(53)のような例についても、「あなたがいなくて退屈する」という事態にむかって進みつつあった事態の進展が未達成におわったことを未完了相の半過去が示しているのである。

このようにして見てくると、「遅滞型」、「早期型」、「非時間型」のいずれにおいても、「『起きても当然のこと』とみなされるような事態が回避された(あるいは結末を目前にして頓挫した)」<sup>11</sup>という点が共通している。すなわち、半過去であらわされる事態があらかじめ前提されているのである。この共通性が基盤になっていると考えれば、未完了相からの説明をそのまま「早期型」や「非時間型」へと拡大適用しうることは、むしろ自然なこととして了解されよう。

## 7. 等位接続詞 et の使用について

ところで、間一髪の半過去においては、大多数の例で<sup>12</sup>副詞句のあとに等位接続詞 et を介することができる。以下には典型例のみ再掲する。

- (1) Une seconde de plus il l'éventrait. ⇒ (1') Une seconde de plus et il l'éventrait.  
 (3) Un peu plus, il était mort. ⇒ (3') Un peu plus et il était mort.  
 (4) Une minute de plus, le train déraillait. ⇒ (4') Une minute de plus et le train déraillait.

- (6) Une minute plus tôt, tu la voyais. ⇒ (6') Une minute plus tôt et tu la voyais.
- (10) Un mot de plus, il prenait une gifle. ⇒ (10') Un mot de plus et il prenait une gifle.
- (12) Un pas de plus, tout sautait. ⇒ (12') Un pas de plus et tout sautait.
- (14) Encore un verre, il tombait raide. ⇒ (14') Encore un verre et il tombait raide.
- (16) Moins cher, c'était du fil de fer. ⇒ (16') Moins cher et c'était du fil de fer.

このことはなにを意味しているのであろうか。それは、間一髪の半過去があらわれる文が、本来「仮定のもとでの帰結」をあらわす条件文ではないことを示している。その意味で、(43)(44) でみたような条件文への言い換えはミスリーディングである。それぞれのもとの文 (et を入れるまえの文) は、あくまでも並置 (parataxe) の構文になっているのであり、副詞句部分もふくめた全体としてひとまとまりの状況を示していると思われる。

並置の多くの場合にみられる特徴として、前後関係の類像性 (iconicité chronologique), すなわち、並置されるふたつの要素が、表現のうえでも時間的前後関係の順に生起するということがあげられる。たとえば、

- (57) J'aurais un peu d'argent, je m'achèterais l'intégrale de Mozart.

(Riegel et alii, 1994, p. 318)

すこしばかりお金があれば, モーツァルト全集を買うのになあ。

においては、条件法現在におかれたふたつの文が、接続詞なしで並置されている。このとき、「お金がある」という事態と「モーツァルト全集を買う」という事態のあいだには、この順で起きる前後関係がみとめられる。この例とおなじような前後関係が「副詞句+間一髪の前過去」の並置にもみとめられることから、2節の (iii) でみた、副詞句がかならず前置されることにも説明がつくのである<sup>13</sup>。

一方、つぎの (58)~(60) にみるように、et をいれづらい例もある。

- (58) Une minute après, il était K. O. 1分後なら、かれはノックアウト

されていただろう。

⇒ (58') \*Une minute après et il était K. O.

(Berthonneau et Kleiber, p. 10, n. 11)

(59) L'instant d'après, le train déraillait. (Le Goffic 1986, p. 66) 一瞬後には列車は脱線したのだった / (?) していただろう。

⇒ (59') \*L'instant d'après et le train déraillait.

(60) A une seconde près, il gagnait son pari! (Le Goffic 1986, p.67) 1秒差で、かれは賭けに勝っていた。

⇒ (60') \*A une seconde près et il gagnait son pari!

これら、et の挿入が不可能な例においては、これまでみてきた例となりがちがうのであろうか。それは、et による等位接続がはばまれることから直接しめされるとおり、副詞句と主節との関係が並置構造ではなくなっているように思われる。

(58)(59) においては、副詞句は時間的的定位 (repère temporel) をあらわしているのではなかろうか。Berthonneau et Kleiber の説<sup>14)</sup>に反し、「起きえた事態」を時間的に定位することは可能であると思われる。その証拠に、「いつ列車が脱線しえたか」(A quel moment le train pouvait-il dérailler?) を問うことはなんら不当ではない。

一方、(60) は、「一秒差で勝っていた」、いわば「ずれた勝利」というひとつの事態が示す、単なる過去の状態をあらわす半過去であって、そもそも「間一髪 of 半過去」の用法にふくめることができないように思われる。

## 8. 西日本諸方言との対照

以上で考察してきたフランス語の「間一髪 of 半過去」と類似している事例として、西日本諸方言(四国, 中国, 九州, 和歌山など。京阪を除く)<sup>15)</sup>において未完了をあらわす「動詞の連用形+よる」に「た」を接続した「～よった」という形式の、おなじく「間一髪」をあらわす用法である。以下では、フランス語の「間一髪 of 半過去」と、「間一髪 of 『～よった』」との対照研究の可能性をさぐってみたい。

まず、日本語の標準語との対比で、当該の西日本諸方言のアスペクト標示の特徴を確認しておきたい。標準語のアスペクトマーカ―として、「～ている」

という形式があるが、これは完了と未完了（結果と進行）の標示をを兼務していることが知られている<sup>16</sup>。つぎのふたつの例をみると、

- (61) 桜の花が散っている。(工藤 2006, p. 96)  
 (62) 山に登っている。(idem)

(61) は、桜の花が散りつつある（「いま散っている」）のか、散りおわっている（「すでに散っている」）のか、両義的である。また (62) においても、山に登りつつある（「いま登っている」）のか、登りきっている（「すでに登っている」）のか、両義的である。これに対して、西日本諸方言では、標準語の「～ている」に対応する形式として「～よる」と「～とる」（またはそれらの音韻的ヴァリエント）のふたとおりがあり、それらのあいだでアスペクト対立がある。(63) (65) の「～よる」が未完了（進行）をあらわし、(64) (66) の「～とる」が完了（結果）をあらわす。

- (63) 桜の花が散りよる。(工藤 2006, p. 96)  
 (64) 桜の花が散るとる。(idem)  
 (65) 山に登りよる。(idem)  
 (66) 山に登るとる。(idem)

より具体的に、工藤(1995)があげている、愛媛県宇和島方言の例をみよう。

- (67) 昨日、庭でへびが死によった。水かけてやったら元気になった。  
 (工藤 1995, p. 263)  
 (68) 昨日、庭にへびが死んどった。お墓作ってやったんよ。(idem)

「～よる」をもちいた (67) では、「死によった」は「死につつあった」「瀕死だった」という未完了の意味になるのに対して、「～とる」をもちいた (68) では、「すでに死んでしまっていた」という完了の意味になる。そして、前者の「～よった」に、「間一髪」をあらわす用法がみとめられる。(69)～(71) も宇和島方言の例である。

- (69) あぶなや、あの子、車道に飛び出して死によった。(工藤 2002, p. 87)



- (70) 私, もうちょっとで人のお酒飲みよった。(idem)  
 (71) 「あんた, 何しよるの, 日曜日ぜ」「あ, 間違うて学校に行きよった」(idem)

これらはいずれも, 「死にかねなかった」「飲みそうになった」「行こうとしていた」という「間一髪」(工藤の用語では〈非実現〉)をあらわしている。

工藤(2002, p. 83)は, 「～よる」につぎの(72)のような文法化(ムード化)の過程を想定している。

- (72) 〈動作進行〉 → 〈変化進行〉 → 〈将然〉 → 〈非実現〉(過去形のみ)  
           └──────────→ 〈多回〉 → 〈反復〉

ここで問題とする「間一髪」に直接関係する, (72)の上の列だけを見ると, それぞれつぎのような用例が各用法に対応している。

- (73) 空に飛行機が飛びよる。〈動作進行〉(idem)  
 (74) ちょっとずつ傷が治りよる。〈変化進行〉(idem)  
 (75) もうちょっとで治りよる。〈将然〉(idem)

さて, 上記を前提として, 「間一髪の『よった』」について考えてみたい。ただし, 愛媛県宇和島方言には本稿筆者の知識や調査がおよばないので, ここでは本稿筆者の知りうる愛媛県今治方言の例を考えてゆくことにする。なお, 今治方言にも「よる」「とる」の対立があることはもちろん, それらの使いわけについても, 工藤(1995)(2002)(2004)(2006)をみるかぎりでは, 宇和島方言と今治方言でまったく同様である。以下では, 第1節でみた(1)～(18)からの(標準語への)和訳である(1標)～(18標)をかかげ, さらにそれぞれに対応する愛媛県今治方言を(1愛)～(18愛)として示す。(1愛)～(18愛)においては, 「よる」をもちいた表現に一重下線, 「とる」をもちいた表現に波線下線, そして単純な過去形(「た」形)をもちいた表現に二重下線をほどこして区別することとする。

- (1標) あと1秒で, 牛は彼女を切りさくところだった。  
       ⇒(1愛) あと1秒で, 牛は彼女を切りさきよった。  
 (2標) あと1秒で, 犬につかまって食われるところだった

- ⇒(2愛) あと1秒で、犬につかまって食われよった。
- (3標) もう少しで死んでいたぞ。
- ⇒(3愛) もうちいとで死によったが。
- (4標) あと1分で電車は脱線していた。
- ⇒(4愛) あと1分で電車は脱線しよった。
- (5標) あと1分で、ラッキー・リュークはインディアンの捕虜になっていた  
(ところだ)。
- ⇒(5愛) あと1分で、ラッキー・リュークはインディアンの捕虜になりよ  
った。
- (6標) あと1分早ければ、きみも彼女に会えていたのに。
- ⇒(6愛) あと1分早かったら、あんたも彼女に会えとったのに。
- (7標) もう少し早ければ、用意ができていなかったから。
- ⇒(7愛) もうちいと早かったら、用意ができとらざったけん。<sup>17</sup>
- (8標) もう少しでわたしは車止めに突っ込んでいたところだ。
- ⇒(8愛) もうちいとでわしは車止めに突っ込みよった。
- (9標) もうちょっとで転んでたよ。
- ⇒(9愛) もうちいとで転びよったがね。
- (10標) もうひとこと言っていたら、平手打ちをくらっていただろう。
- ⇒(10愛) もうひとこと言う(とっ)たら、平手打ちされとったろう。
- (11標) あと2キロやせていたら、ワンピースにからだが入っていたのに。
- ⇒(11愛) あと2キロやせとったら、ワンピースにからだが入とったの  
に。
- (12標) あと一歩で、すべてが吹っ飛んでいたところだ。
- ⇒(12愛) あと一歩で、みな吹き飛んどった。/吹き飛びよった。(後者は  
〈非実現〉もありうるが〈将然〉の解釈が優勢)
- (13標) あと一歩で、彼女は通りに出ていた。
- ⇒(13愛) あと一歩で、彼女は通りに出とった。/出よった。(12愛)と  
同様)
- (14標) あと一杯で彼は酔っていた。
- ⇒(14愛) あと一杯で彼は酔うとった。/酔いよった。(12愛)と同様)
- (15標) あと一箱載せていたら、扉が閉まらないところだった。
- ⇒(15愛) あと一箱載せとったら、扉が閉まらざった。「よる」も「とる」  
もない「た」形)

(16標) これより安いものといえば、針金くらのものだったでしょう。

⇒(16愛) これより安いもんいうたら、針金くらのもんじゃったろう。／  
じゃろう。

(17標) あなたがいなければ、わたしは退屈していたでしょう。

⇒(17愛) あんたがおらざったら、わしは退屈しとったろう。

(18標) 機関士の機転がなければ、列車は脱線していた。

⇒(18愛) 機関士が機転をかかせざったら、列車は脱線しとったろう。

これらの例での「～よった」「～とった」「～た」の分布をみるだけでただちに理解できることであるが、愛媛方言における「間一髪の『よった』」は、(1愛)～(5愛)にみるように、遅滞型の例にはよく対応している。それに対して、早期型には、(6愛)(7愛)にみるように「～とる」を使っている。そして、非時間型には、事態そのもののアスペクト的性質<sup>18</sup>に応じて、「～よる」、「～とる」、あるいは「～よる」も「～とる」もない「～た」形を使いわけている。具体的には、(10愛)(11愛)の場合は完了的にとらえられる事態なので「～とる」、(12愛)の場合は未完了的にとらえられる事態なので「～よる」も可能、(15愛)(16愛)の場合はアスペクト対立が問題にならないので「～た」形のみ、というように、事態そのもののアスペクト的性質を反映する形式が選択されているのである。このことが意味していることは、**愛媛方言では、狭義の「未完了」に「よる」を用いる**、ということである。その場合はフランス語の「間一髪の半過去」に似ているが、「間一髪の半過去」とちがって、「メタ未完了相」への拡張はほとんど見られない<sup>19</sup>。

もうひとつ、「間一髪の半過去」と「間一髪の『よった』」の対照から得られる結論として、フランス語では(19)(20)で確認したとおり、副詞句を先だてることが必須であったが、愛媛方言ではたとえば(69)のように副詞句がなくても「間一髪の『よった』」を用いるという事実を指摘することができる。したがって、後者では時間や量の「変更」が必須ではないと考えられる。副詞句なしの場合は、いっそう直接的に、「～よった」のまえにくる動詞の示す過程にすでにはいつていることが示されていることになり、上記でいう「狭義の未完了」ともつながっていると考えられる。

## 註

<sup>1</sup> この論文は、2006年度筑波大学人文社会科学研究所プロジェクト研究（助成研究(B)）「フランス語および日本語におけるモダリティの研究」（研究代表者渡邊淳也）および2007年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）課題番号19520414「日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究」（研究代表者和田尚明，研究分担者渡邊淳也）の補助をうけている研究の成果の一部である。

<sup>2</sup> ロマンズ諸語のなかでも、半過去（と起源をおなじくする時制）が「間一髪」をあらわす用法を熟させている言語はかぎられている。Busuioc (2004, p. 41)によると、はっきりとこの種の用法が観察できるロマンス語は、フランス語のほか、ルーマニア語、イタリア語のみであるという。ルーマニア語にはつぎの(i)のような例がある。

(i) *Încă un minut și plecăm.* (ibidem, p. 50) あと1分でわたしは出発していた（ところだ）。

また、イタリア語にはつぎの(ii)のような例があり、「切迫の半過去 *imperfetto imminente*」(Bertinetto 1986)とよばれている。

(ii) *Ancora un attimo, e il treno deragliava.* (idem) あと一瞬で列車は脱線していた（ところだ）。

<sup>3</sup> «*Il représente l'enfant qu'était alors Stendhal, et la phrase où figure ce pronom transcrit, au style direct, les propres paroles du vieillard témoin de l'accident*» (Wagner et Pinchon 1962, §. 444)

<sup>4</sup> とくに副詞句の解釈、および断絶の半過去との差異化については、意見が大きくわかれている。

<sup>5</sup> ここで概略的に「条件をあらわす」といったが、問題になっている副詞句は、せいまい意味での「假定」をあらわしているわけではない。この点に関する議論は7節を参照。また、副詞句が「必要である」とした部分については、見かけ上はつぎのような反例が存在する。

(i) *Le déplacement d'un atôme rompaît la chaîne de faits fortuits qui, au fond de la Bretagne, me prépara pour une vie d'élite.* (E. Renan, cité dans 中平 1957, p. 265) たったひとつの要素でも動かしていたら、わたしをブルターニュの片田舎からエリートの人生へとひきあげた偶然の連鎖はこわれてしまっていた（だろう）。

しかしながら、この例は完全な反例ではない。主語の *Le déplacement d'un atôme* がそれ自体でありえない条件をあらわしていることから、副詞句であらわされるような条件の標示が主語によって肩代わりされているとみなすべきである。

<sup>6</sup> 断絶の半過去については、Berthonneau et Kleiber (1999) 大久保 (2002) および春木 (2004) を参照。基本的には未完了相のはずの半過去が、断絶の半過去の用法において例外的に実現（成立）した事態をあらわしているのであるが、本稿筆者の考えでは、そうであるからといってこれを（単純過去であらわされるような）まったくの「完了」と見なすことは適切ではない。たとえなまの言語外現実としては「完了」した事態であっても、それをあらわす動詞が半過去におかれることにより、その事態は説明や描写のために未完了的にとらえなおされていると

考えられる。この点で、断絶の半過去は、(28)の日本語訳でも使用した日本語の「のだ」文に似る。

- <sup>7</sup> 朝倉 (2002, p. 257) は、「未完了 (inachèvement)」をあらわす半過去からの「派生的用法」として、「①試みて実現できなかった行為：Les pleurs qu'il retenait coulèrent un moment. (Vigny, *Prison*)『こらえんとすれど、一瞬涙がながれた』」、「②企てた行為の中断：Ma mère se réveilla brusquement comme je parlais. (Sagan, *Sourire*, 143) (= j'étais sur le point de partir, j'allais partir)『出かけようとしていたとき、母が突然目をさました』」などをあげている。これらも類例であるといえる。
- <sup>8</sup> さらにつけくわえるとすると、「L'instant d'après, le train déraillait» (一瞬後には列車は脱線したのだった／(?)していただろう)(Le Goffic 1986, p. 66)の例を、Le Goffic (ad loc.) は両義的であるとするが、Busuioc (2004, p. 61) は実現の解釈にかざられるとしており、見解がわかれている。
- <sup>9</sup> このことは、春木 (2004) のことばでいうと、属性を付与するという半過去の内在的機能が、事態認識の方策としてもちいられているということになろう。その考えかたも方向性としては本稿と対立するものではないが、本稿では、説明や描写のために未完了アスペクトが応用されていると考えており、したがってアスペクトの標示を半過去の機能の基本的な要素としていっそう重視する考えかたをとっている。断絶の半過去において観察されるアスペクトは「完了」ではないか、という疑問に関しては註6をあわせて参照されたい。
- <sup>10</sup> (55)(56)の説明で比喩的にもちいた「シナリオ」とは、半過去の動詞があらわす事行をひとこまとしてふくむ、さまざまな事態の時間的・概念的前後関係がつくる連続性のことである。渡邊 (1998) (2001) (2004) で、半過去形態素-ait が「連続性」を示すとする仮説を提出したが、その「連続性」はここでも貫徹されているのである。
- <sup>11</sup> 「起きて当然」の「前提された事態」とは、Martin (1983) が Kripke 流の分岐的時間 (temps ramifié) をもちいて展開している可能世界意味論のなかで仮定している「期待世界 monde des attentes」とも関連づけられると思われる。また、そのことからの派生命題として、Martin の「分岐的時間」や、独立して構築されながらもそれに酷似している定延 (2004) の「運命の分岐点」といった概念をもちいて間一髪半過去を説明することも可能であるという見とおしをもっているが、本稿ではそこに立ち入る余裕はないので、別の機会に論ずることにしたい。
- <sup>12</sup> 前置詞 sans...ではじまる副詞句をもつ例については、et を挿入した «Sans vous et je m'ennuyais» のような文を可とするものと否とするものに母語話者の意見がわかる。
- <sup>13</sup> 並置の構文についての詳細な記述や考察については、川島 (2001) を参照のこと。
- <sup>14</sup> « [...] le train ne déraille pas «une minute de plus», puisqu'il ne déraille pas du tout», Berthonneau et Kleiber (2003, p. 8) 起きていない事態であれば、それを時間的に位置づけることなど問題にならない、という論法である。
- <sup>15</sup> 京阪では、「～とる」や「～てる」を完了・未完了の点では無差別に使い、「～よる」は「泥棒が窓を破って入ってきよった」のように貶下的 (péjoratif) に用いる。なお、「～とる」「～よる」のアスペクト対立が存在する範囲は、工藤 (2006, p. 103)

によると、「北限は岐阜県高山から南限は種子島までの西日本地域。ただし京阪を除く」。

- <sup>16</sup> 国広 (1987) (1996) は、「～ている」に完了・未完了をいわば融合的に示すアスペクト標示機能をもとめ、実際の完了・未完了の区別は認知的になされるとしている。国広 (2005) ではそれをさらに押しすすめて、副詞などのさまざまな要素に完了・未完了の標示の兼務をもとめ、個々の表現レベルでは多義性をむしろ常態であるとする。一方、工藤 (2006) はつぎのようにいっている。「動的出来事が終わる前の〈進行段階〉も動的出来事が終わった後の〈結果段階〉も、シテイルという同じ形式で表す標準語の方が、世界の諸言語では稀であって、西日本方言のように別の形式で表し分けるほうが普通である。アスペクトに関わる言語類型論的研究は最も進んでいるのであって、この成果を参照すれば、標準語のアスペクトの絶対視は禁物であることがわかる。むしろなぜ標準語ではそうになってしまっているか、歴史的観点から考察することが必要になってくる」(ibidem, p. 97)
- <sup>17</sup> 「もうちいと早かったら、用意ができよらざったけん」という発話文も、べつの文脈では可能であるが、(7)に対応する意味では不可能である。「できよらざったけん」が可能になるのは、ここでいう「用意」が、対話者をむかえ入れる準備ではなく、むしろ対話者と共同で今後なにかを用意することであるような場合である。しかし(7)の場合はそのような解釈ではなく、むしろ「用意ができている」という結果状態(の否定)が問題になっているのである。愛媛方言は、こうした事態そのもののアスペクトを「とる」(「できとらざったけん」)によって標示することを、問一髪の解釈を標示する以前の先決問題として扱っていると考えられる。
- <sup>18</sup> ここでいう「事態そのもののアスペクト的性質」については、註17をふたたび参照されたい。
- <sup>19</sup> ただし、日本語(標準語、愛媛方言とも)で「あと1分早かったら」のような早期型副詞句や「あと2キロやせていたら」のような非時間型副詞句に、時間的副詞としては遅滞型のはずの「あと」がもちいられることは、別の意味で「メタ未完了相」への拡張にあずかっていると考えられる。「あと」は、早期型ではより早い仮定へとむかう勾配 (gradient) のうえで、非時間型ではよりはなはだしい程度へと極まってゆく勾配のうえで、それぞれ心的走査 (parcours mental) のさらなる進行を仮定し、発話文全体としてはそこまでは至らないことを示す、という意味で「メタ未完了相」になっているのである。

## 参考文献

- 朝倉季雄 (木下光一校閲) (2002) : 『新フランス文法事典』白水社。  
 阿部宏ほか (2000) : 「文献案内: 半過去研究」『フランス語学研究』34, pp.56-69。  
 Berthonneau, A. -M. et G. Kleiber (1993) : «Pour une nouvelle approche de l'imparfait : l'imparfait, un temps anaphorique méronomique», *Langages*, 112, pp. 55-73。  
 Berthonneau, A. -M. et G. Kleiber (1994) : «L'imparfait de politesse : rupture ou

cohésion?» , *Travaux de linguistique*, 29, pp. 59-92.

- Berthonneau, A. -M. et G. Kleiber (1997) : «Subordination et temps grammaticaux : l'imparfait en discours indirect» , *Le français moderne*, 65, 2, pp. 113-141.
- Berthonneau, A. -M. et G. Kleiber (1999) : «Pour une réanalyse de l'imparfait de rupture dans le cadre de l'hypothèse anaphorique méronomique» , *Cahiers de praxématique*, 32, pp. 119-166.
- Berthonneau, A. -M. et G. Kleiber (2003) : «Un imparfait de plus... et le train déraillait» , *Cahiers Chronos*, 11, pp. 1-124.
- Berthonneau, A. -M. et G. Kleiber (2006) : «Sur l'imparfait contrefactuel» , *Travaux de linguistique*, 53, pp. 7-65.
- Bertinetto, P. M. (1986) : *Tempo, aspetto e azione nel verbo italiano*, Accademia delle Crusca.
- Busuioic, I. (2003) : «La prédication contrefactuel : l'imparfait d'imminence contrecarrée» , *Revue roumaine de linguistique*, 48, pp. 113-119.
- Busuioic, I. (2004) : «L'imparfait d'imminence contrecarrée en français et en roumain» , *Revue roumaine de linguistique*, 49, pp. 41-67.
- Confais, J. -P. (1990) : *Temps, mode, aspect*, Presses universitaires du Mirail.
- Ducrot, O. (1979) : «Imparfait en français» , *Linguistische Berichte*, 60, pp. 1-23.
- Gosselin, L. (1999) : «Les valeurs de l'imparfait et du conditionnel dans les systèmes hypothétiques» , *Cahiers Chronos*, 4, pp. 29-51.
- Grevisse, M. (1993<sup>13</sup>) : *Le bon usage*, Duculot.
- 春木仁孝 (1999) : 「半過去の統一的理解をめざして」『フランス語学研究』33, pp. 15-26.
- 春木仁孝 (2000) : 「J'ai rencontré un réfugié qui arrivait du Kosovo. —— 半過去の属性付与機能について ——」『フランス語フランス文学研究』77, pp. 84-95.
- 春木仁孝 (2004) : 「事態把握の方策としての半過去」『言語文化研究』(大阪大学) 30, pp. 229-251.
- 市川雅己 (1988) : 「半過去の本質的機能について —— 「物語の半過去」を通して ——」『筑波大学フランス語フランス文学論集』5, pp. 81-93.
- 市川雅己 (2007) : 「半過去形のアポリア」『熊本大学文学部論叢』94, pp. 1-12.
- 川島浩一郎 (2001) : 「Une aspirine et ça passera 型構文と等位接続」『ふらんぼー』(東京外国語大学) 27, pp. 11-26.
- 川島浩一郎 (2006) : 「フランス語の複合過去と半過去に関する一考察」『福岡大学研究部論集』6, 3, pp. 37-61.
- 国広哲弥 (1987) : 「アスペクト辞『テイル』の機能」『東京大学言語学論集』8, pp. 1-7.
- 国広哲弥 (1996) : 「認知意味論の諸問題」1996年2月29日, 筑波大学における講演ハンドアウト.
- 国広哲弥 (2005) : 「アスペクト認知と語義 —— 日本語の様態副詞と結果副詞を中心として ——」武内道子編『副詞的表現をめぐる』ひつじ書房, pp. 29

-46.

- 工藤真由美 (1995) : 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房。
- 工藤真由美 (2002) : 「文法化とアスペクト・テンス」上田博人編『日本語学と言語教育』東京大学出版会, pp. 71-92.
- 工藤真由美編 (2004) : 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』ひつじ書房。
- 工藤真由美 (2006) : 「アスペクト・テンス」小林隆編『方言の文法』岩波書店, pp. 93-136.
- Lebaud, D. (1991) : «L'imparfait, une approche à partir de quelques effets indésirables causés par le discours grammatical dominant», *Cahiers de CRELEF*, 32, pp. 49-69.
- Lebaud, D. (1993) : «L'imparfait, indétermination aspectuo-temporelle et changement de repère», *Le gré des langues*, 5, pp. 160-176.
- Le Goffic, P. (1986) : «Que l'imparfait n'est pas un temps du passé», P. Le Goffic (dir. ) : *Points de vue sur l'imparfait*, Presses universitaires de Caen, pp. 55-70.
- Le Goffic, P. (1995) : «La double incomplétude de l'imparfait», *Modèles linguistiques*, 31, pp. 133-148.
- Maingueneau, D. (1999) : *L'Énonciation en linguistique française*, Hachette.
- Martin, R. (1971) : *Temps et aspect : essai sur l'emploi des temps narratifs en moyen français*, Klincksieck.
- Martin, R. (1983) : *Pour une logique du sens*, P. U. F.
- Martin, R. (1987) : *Langage et croyance*, Margada.
- 中平 解 (1957<sup>\*)</sup>) : 『フランス語学探索』大学書林。(第11章「Conditionnel passéの代りに用いられる直説法半過去に就いて」)
- 小熊和郎 (2002) : 「半過去と〈境界〉の消去」『西南学院大学フランス語・フランス文学論集』43, pp. 127-159.
- 大久保伸子 (2002) : 「切断の半過去について——Huit jours plus tard, elle mourait...」『フランス語学研究』36, pp. 14-29.
- 大久保伸子 (2007) : 「フランス語の半過去の未完了性と非自立性について」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』2, pp. 19-39.
- Riegel, M. et alii (1994) : *Grammaire méthodique du français*, P. U. F.
- 定延利之 (2004) : 「ムードの「た」の過去性」『国際文化学研究』(神戸大学) 21, pp. 1-68.
- Schogt, H. G. (1968) : *Le système verbal du français contemporain*, Mouton.
- 田中善英 (2006) : 『フランス語における複合時制の文法』早美出版社。
- Wagner, R. L. et J. Pinchon (1962, 1991) : *Grammaire du français classique et moderne*, Hachette.
- 渡邊淳也 (1998) : 「他者の言説をあらわす条件法について」『筑波大学フランス語フランス文学論集』13, pp. 109-155.
- Watanabe, J. (2001) : «Le conditionnel du «discours d'autrui» », *Études de langue et de littérature françaises*, 78, pp. 216-230.
- 渡邊淳也 (2004) : 『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社。



渡邊淳也 (2007) : 「フランス語の『丁寧の半過去』と日本語の『よろしかったでしょうか』型語法」『フランス語学研究』41, pp. 54-59.

Wilmet, M. (1997) : *Grammaire critique du français*, Hachette.